

学びの灯

ようこそ、広島都市学園大学 子ども教育学部へ

子ども教育学部には、様々な研究をされている先生方がいらっしゃいます。

このページでは、毎月、一人一人の先生方の思いや考え方などを記していただき、読んだ皆さんの心や頭に「学びの灯」をともします。

一つ一つの「灯」は、いくつか集まると、きっと大きな明るさとなり、皆さんの未来を明るく照らすものとなるでしょう。

また、ある「灯」は皆さんの拠り所となって、どんなときであっても、希望と温かさを保ち続けてくれるでしょう。

さらに、皆さんが「新しい灯」をともし、多くの人々の未来を明るく照らすことに役立つことでしょう。

さあ、今月は、どんな灯でしょうか？



※今回は少し長めて ず。時間の余裕のあるときにゆっくりと うそ 。

子と も教育学部 教員 国語担当 瀧口美絵

「ソ〜ウデ〜」

私が国語の教師になりたいと思ったきっかけは、中学校のときに国語を教えてくれたクマ先生（アダ名）の影響です。

クマ先生の授業は、漢字の学習がゲーム感覚だったし、大嫌いな音読を強要されることもないし、中学校ではあまりされない絵本の読み聞かせもたくさんしてくれました。また、クマ先生はとても面白い人で、授業で冗談を言っはいつも笑わせてくれました。私は中学に入ってクマ先生が教科担任になってから、メキメキ国語が好きになり、私もこんな先生になりたいなぁという憧れの気持ちになりました。

そんなある日、クマ先生が、「ボクは大学で第二外国語の専攻が中国語だったから、中国語が喋れるんだ」と、おもむろに出席簿を取り出して、クラス全員の名前を中国語で読み上げ始めました。私ははじめて知る自分の中国語の名前に心踊り、何度もつぶやきながら覚え、ノートの端にメモしました。

それから数年後、私は大学生になり、クマ先生のような国語の先生になるべく、教員免許を取得するための勉強をしていました。その頃クマ先生は、どう子どもたちとの関係を深めるか、どう楽しい授業・クラス運営を実現するか、考察を深められておられ、クマ先生にあこがれていた私は、クマ先生が教えてくれた勉強会にも参加し、クマ先生が執筆されていた著書を読み、クマ先生の親友で著書の共著者と学生結婚し、クマ先生に結婚式の司会までしてもらいました。

当然、中学のときのワークシートはすべて残してありましてし、見よう見まねで授業法をまとめていたりして、教育実習に行くころには私は、クマ先生のコピーのようになっていました。

ちょうどその頃大学では、私の学年のチューターが中国文学の先生に変わり、挨拶に友達数人と新チューターの森野繁夫先生の研究室を尋ねました。先生の研究室では中国の音楽が流れ、中国茶のいい香りがして、とてもチャイニーズな雰囲気でした。ここが事件現場です。

私はそこで、中学のときクマ先生が私の名前の中国語読みを教えてくれたのを思い出し、よせばいいのに「先生、私中国語で自分の名前言えます」といってしまったのです。そしてみんなの前で得意げに、クマ先生に教えてもらった通り、

「ソ〜ウデ〜ン旧姓増田）」

とやってしまいました。

すると、森野先生は、同室されていた院生さんと一瞬目を合わせ、ハテ？と首をかしげながら

「違うよ？」

と言われました。そして合わせて、「それ、音読みしただけじゃん」とおっしゃいました（正解は、ツェンティアン Zēngtián）。

その瞬間、顔から火が出るような恥ずかしさと同時に、10年近く大切に胸に秘めてきた「ゾウデ〜ン」への思いのやり場にとまどい、脳内迷子になりました。

考えてみれば、クマ先生は、基本的にいつもお調子者でした。授業を終えて、教室の去り際に、日直として黒板に書かれていた吉本君の「吉」の上の方の「土」の突き出している部分を指でチョチョッと消して「エロ本」にして逃げたり（←担任の先生にこっぴどく怒られてた）、バレンタインデーの前の日に「チョコ募集中です」と、授業中に募集しちゃったのが学年主任にばれたり（←次の日全校集会で「不要物は持ってこないように」と言わされてた）、よく考えてみると、著書の見出しも「ちゃらんぼらんばんざい」だったし。

だから総合して考えると、この件の問題は、クマ先生の「ゾウデ〜ン」ではなく、私のウラドリ確認ができていなかった、ということです。クマ先生の性格はよく分かっていたわけですし、そもそも学生時代に第二外国語を履修していた程度でクラス全員分の個人名を中国語でスラスラいえるわけではないし、その後私の同級生に確認したら、「先生が読み上げてる途中くらいから、みんな音読みしてるだけだって気づいてたよ」って言ってたし。

模擬授業で学生に、私が「なぜ授業のまとめに感想を書かせたのですか？」とか、「なぜ授業展開が「音読→漢字学習→精読→感想」になっているのですか？」という質問すると、学生は、「これまで受けてきた授業がそうだったから」とか、「自分が憧れていた先生がそのようにされていたから」という答えが返ってきます。そういうとき、私はいつもこの話をします。

学生が教師になりたいと思うとき、人は多かれ少なかれ、憧れの教師像というものを胸に秘め教壇に立ちます。思い出すのは、尊敬する先生の授業風景や、しぐさ、言い回し。先生になったら、あの先生が毎週配ってくれていたようなワークシートをつくろう、楽しかった人形劇を授業のまとめに絶対やりたい、と、夢を抱いていると（現場に出て忙しくなってきた場合も）、ついHow toに走りがちです。

確かに、これまで学生にとっての「授業」は、学習者という立場で捉える「授業」であり、指導者の立場としての「授業」ではなかったわけです。そのため、その教師がなぜこの授業展開を選んだのか、その授業方法は果たして適切だったのかは、今となっては検討の余地がありません。しかしながら、その先生にはその先生の、授業目標、主義主張、思想があるわけで、どんなカリスマ教師の授業であったとしても、「あの先生がやっていた通りやればいい」という模倣のためのサンプルや、「国語の授業はこうあるもの」とか、「このような流れで構成すべき」というステレオタイプ（典型）を提起してくれるものではないのです。教師の「国語の授業はこういうものだ」という思い込みのせいで、国語の授業は良くも悪くも明治時代から変わらぬステレオタイプ

を辿っていることは、国語科教育全体の大きな問題です。そのせいで変な授業展開になっていた
り、音読や書き取りばかりやらされて苦しんでいる子どもがたくさんいたりします。

授業とは、自分で持った目標に従って自分で展開させていく必要があります。そのため、実際
に教壇に立つには、授業で「何がやりたいか」ではなく、まず、「学習者にどのような能力を身
につけさせたいか」、「どのような学習者を育成する必要があるのか」、という、目標を設定しま
す。これまで読み取ってきた登場人物の心情ノートをもとに交流会を開き、心情理解を深めたい
なら、授業の冒頭には、思考が分散するリレー読みをするより、範読や音読CDの聴取をしなが
らじっくり黙読させたほうが円滑に進むかもしれませんし、憧れの先生の授業をコピーしたいな
ら、その先生の授業の授業目標は何か、なぜそのような組み立てで授業を展開させたのか、ウラ
ドリをして吟味する必要があります。

このように、授業目標が明確になっていれば、内容、方法は必然的に定まってくるし、本授業
で音読が必要か、黙読の方がいいのか、音読は範読がふさわしいか、リレー読みがふさわしいか、
群読がふさわしいかといったことを考え、選択する余地が出てくるのです。

私は今でもちょくちょくクマ先生を訪ね、「何か勉強になるプリントない？」とか「おもしろ
い漢字ゲームない？」とか、教材をもらいに行きます。そして自分の授業展開にぴったりの場面
で提示したりもします。しかし、今ではその前にきちんとウラドリし、授業目標と照らし合わせ
て組み立てます。それは、あこがれているクマ先生の授業を背負った、私の授業なのです。